

二〇一三年十月四日 開催

「街角でふれるコトバと社会」シリーズ 第4回——中東言語

触る神には福来たり、祈り好きな

コミュニケーションの達人——ペルシア語の Oh my God あれこれ

下山伴子

■講演者……下山伴子(元東京外国語大学講師)
■司会……林 史樹(本学アジア言語学科教授)

ペルシア語はこの言葉？

ペルシア絨毯、ペルシア猫、ペルシアのガラス、古代ペルシア帝国……ペルシアと聞いて咄嗟に連想するのはきつとこんなおとぎ話のような単語ばかりで、多くの人にとって、そもそも今でもペルシアという国が存在するのか、ペルシア語なんて一体どこで話されている言葉なのか、雲を掴むような話に思えるだろう。現実には、ペルシア語は一九三五年にペルシアから国号を改めたイランの国語で、周辺の中央アジア諸国でもペルシア語や類するタジク語やダリー語が話されている。さてイランと聞けば、今度は一転して、イラン・イスラム革命や世界有数の産油国、核問題をめぐる国際政治な

ど、極めて政治的なイメージが浮かんでくる。また八〇年代後半から国際的に注目を集めてきたイラン映画は日本でも馴染深く、人間性というテーマを叙情豊かに描くイラン映画を通してこの国に対する見聞を深めている映画ファンの人達も多い。でもこうして並べてみても、いったいイランがどんな国なのかなかなかピンと来ないし、メディアから流れてくる危なげないイメージのほうが一人歩きしていることも確かだろう。

イランという国をなかなか上手く想像できないのは、日本で一般によく知られていないという理由だけでなく、この国にまつわる歴史の長さや地域的広がり、文化的な奥行きの高さのためでもある。イランの歴史や文化を考える場合、現在の国境線を遙かに越えて歴史的にイラン文化圏だった広大な地域も含まれる。その範囲は例えば、西はギリシア世界、東



下山先生



ミニチュールの中のペルシア庭園



古都マラーゲのペルシア庭園

は中央アジアやインド世界と接していたアケメネス朝ペルシアを考えてみればいい。何が「イラン的な」文化かというのはとても一言では語りきれない奥の深いテーマだが、例えば、唯一神を信仰し啓典を持つ世界最古の宗教ゾロアスター教が生まれ、パラダイス (paradisus) 原義は砂漠に造られたオアシス庭園) という語や思想、そんな美しい天上の楽園を様々なモ

チーフで織り込んだ絨毯が生まれた文化と言ってみればいいだろうか。イスラーム時代に下れば、タイル細工の美しいドーム建築やミニチュール等の芸術、スナナ派イスラームと異なる点の少なくないシリア派独自の発展を「イラン的」と言ってみることもできるだろう。イラン高原を中心に東方と西方へ広がるイラン世界は古来東西文明の交流した地帯であり、

特にイスラーム時代以降は様々な異民族支配を経験してきたが、様々な文化潮流を柔軟に取り入れる国際性をもちながら、独自のイラン的要素を保ちつづけ、常に外来の文化をいわずにイラン化してきたことも、「イラン文化」を語る上で重要な点である。イランの歴史や文化に触れたことのある人なら誰でも、こうした奥行き深さや一筋縄でいかない魅力を感じたことがあると思う。

そんな一筋縄でいかない魅力に満ちた典型的なイラン人の性格を素描してみるとしたら、たぶん、ユーモアが大好き、頭の回転が速く当意即妙に富む、詩人である、もてなし好き、という温かくスパイスの効いた魅力が挙げられるだろう。

イラン人と神

でも、イラン人らしさの特徴づける一番の要素はなんといっても、ゾロアスターの時代から現在まで変わることなく続いてきた（つまりイスラームより遙かに古い）唯一の神への信仰である。といっても、イラン人が神を信じる姿はメディアで描かれるドグマティックなイメージとは違って変わって、純粹ながらもどこか大らかで楽しそうでさえある。イラン人にとって、神は決して何かに喩えたりできない超越的な唯一神なのだが、同時に友達のように親しく身近な存在で、日常でもごく自然に意識しているように見える。そんな彼らをよく

表すのが、日常会話で誰もが当たり前に「神」という単語を使うことだ。それは例えば、ユダヤ教徒がヘブル語の「神」という単語を畏怖する余り、極力使わないようにしているうちに正しい発音を忘れてしまったという逸話と好対照をなしている。イラン人は大人から子供まで、モスク等の聖なる空間や礼拝の時に限らず、パン屋の列でも、混雑したバスでも、若者がお洒落して集ったパーティーでも、いつでもどこでも気軽に神に呼びかけながら過ごしていて、「神」という単語は間違いなくペルシア語会話で最もよく耳にする言葉だ。

イラン人が神に対して持つ親しさの感覚はたぶんイラン文化のベースとしても重要な要素で、古来イランに地上のユートピアを築こうとする思想が度々生じてきたことも、慢性的な高インフレなどで日常生活は苦労しながらシビアに過ごしても、イラン映画に描かれるような豊かな世界が人々の心から失われず、厳しい現実には不屈のユーモアで乗り切ってしまうことも、こんなところに理由があるのかもしれない。

前置きはこのくらいにして、以下では、こんなイランの人々が日常会話の中でどんな風に「神」という単語を使っているのか覗いてみたい。イランに数年暮らしてみても、人々の様々な日常に紛れて、筆者が実際に耳にしたり、出かける先々で友人たちに質問して集めたりした会話から、代表的なものを紹介してみよう。

日常会話に溢れる神ホテという単語(初級編)

ペルシア語で神はホダー(Khodā)と言う。これはイランにイスラームが入ってくる以前から使われていた単語で、イランではアラビア語のアッラー(Allah)よりもよく使われる。ちなみに、ペルシア語はセム系のアラビア語とは全く異なる印欧語なのだが、イランにイスラームが浸透する過程でそれまでのパフラヴィー文字に代わってアラビア文字で書かれるようになり、アラビア語の借用語も多数入ってくることとなった。これは日本語と漢字の関係に似ていて、大半のイラン人にとってアラビア語は日本人にとっての中国語や漢文、またコーランの書かれた言葉という意味では梵語のようなものといえるが、実はそれと同時に、イランがアラブの支配下におかれた歴史を想起させてイラン人やや複雑な心境にしてみよう、あらゆる意味で最も身近な外国語といえる。

それはさておき、神ホテという単語を使った身近なフレーズはまず、「神が守ってくれますように(Khodā hāze)」というごく普通の別れの挨拶だ。少し世代が上がると、下町でチャドルをまとったおばあさんなどは、「あとは神様に預けましたよ(Be khoda seporādam)」とますます親身な口調になる。驚いた時や困った時に思わず口をついて出る「神よ！(ey khoda)」という感嘆詞も英語の Oh, my God 以上によく耳にするし、途方にくれた時は空を見上げて、「私の偉大な神様！

(Khodāye bozorge man)」と助けを求める。嬉しい事には「神に感謝(Khodā rā shokr)」とゴゴヤギ、何かを始める時、よい知らせを望んでいる時は「神が望むなら(Be omide khoda)」神がそうしますように(Khoda kone)」と祈り、悪い知らせを心配する時は「神がそうしませんように(Khodā nakone)」と祈る。こうした表現はペルシア語に限らず、英語をはじめとする印欧語やアラビア語にもあって、人智の及ばない事柄に対して神を意識し、祈りの言葉が口に出てくるのは人間の常かもしれない。またペルシア語が印欧語に属し欧米語の遠い祖先にあたることも、こうした表現が似通っていることと無関係ではないだろう。でもペルシア語の場合、こうした表現は英語などよりもっと身近に多彩なヴァリエーションで使われているようだ。

少し街に出てみると、そんなフレーズが次々と聞こえてくる。通りを歩けば、小さな子が「お願いだから！」とお母さんにアイスクリームをねだっているが、これは「神かけてお願い(Tora khoda)」と頼み事を断りにくくしてしまうフレーズ。お母さんが渋っても、悲しそうな子供を見ると、偶然通りかかったお年寄りが「可哀相バンドホテに」と加勢してあげる。直訳すると「神の僕(bande khoda)」となるが、可哀相な神の僕にはよくしてあげるものですよ、という憐憫の意味が込められている。

乗り合いタクシーに乗ると、運転手や乗客たちが初対面でもすぐに打ち解けて、身近な話題から新聞のニュースまで幅広く情報交換しあっている場面をよく見かける。そんな時は「神にかけて (be khoda)」神を証人として (khoda shahed)」と誓って話の確かさを強調している様子が聞こえてくる。渋滞にうんざりして「ああ神様」とつぶやき、ラジオからサツカーの中継が流れてくると、「神がそうしますように！ ペルセポリスが勝ちますように！」と鼻根のチームの勝利を祈る。話し相手がヘビースモーカーなら、「神がそうしませんように (khoda'i nakarte)」と前置きしつつ、「肺ガンにでもなつたらどうする？ 僕の祖父も——故人に神の憐れみがありますように (khoda rahmatesh kone)——肺ガンで亡くなったんだ。禁煙したほうがいい」と諭し始める。また渋滞や物価高などの話題から真剣な社会批判になれば、世の中に不正や悪が横行すると天災など神の罰が下るとの信仰から、「神がこんな僕たちを憐れんでくれますように (khoda be ma rahm kone)」と祈りの言葉がぼつりと出てくる。そのうち話題はちょっとした相談事に発展して、アパートを買いたいが良い物件はないか、最近息子と上手く行かないがどうしたらいいものかとか、色々と打ち明けつつ、助言や情報を求めてみる。相手が「神は偉大だ (khoda bozorge)」(「神が助けてくれる」の意)と励ましつつ、親身に助言すると、「神が寿命を延ばし

てくれますように (khoda 'omr. bede)」と感謝を伝える。そしてタクシーを降りる時には、「神が助けてくれますように」と互いの幸運を祈って別れていく。さあこんな中でペルシア語を話そうものなら、「たいしたものだ (ma sha allah: 直訳は「神が望むなら」となり、何かを誉める時にまずこう言って邪視を避ける表現)」と感嘆され、今度はこつちがすっかり話題の種になってしまふ。タクシーを乗り換えてアパートに戻ろうとすると、今度の運転手は道中の無事を祈って「神の御名において (be name khoda)」とつぶやいてから出発する。これは何かを始める際の祈りの言葉で、イランでは正式な書類やスピーチ、テレビのニュースなども必ずこのフレーズで始まっている。どこに行っても誰と話しても大体こんな調子で、イランに暮らして神という単語を聞かない日はあり得ない。もちろん人によって誤差があるだろうが、一人の人が一日に何回神という語を使つたか数えてみたら、いったいどんな数字が出てくるものだろうか？

イランの人々が日常会話の中でほとんど無意識に常に神に呼びかけて毎日を通してしているのは、こうした表現が古くから慣用句として定着していることもあるが、何よりも神への信仰心が文化のベースとして今でもしっかりと根ざしていることに他ならない。どんな事でも「神の御名において」始めるべき、というのはイラン人なら誰もが例外なく普通に持つ

ている感覚だが、それは、どんな事物も無始の永遠から存在し給う万物を創造した神によって存在している、という神の唯一性への信仰によるものである。だからイランの人々が驚くほど何かにつけて神に呼びかけるのは、全ては神によって存在するという形而上的な信仰をありふれた日常の中で実践しているのかもしれない。そしてまた、唯一なる神は時と場所を越えて偏在するから、朝起きてから夜眠るまで(また夢の中でも)一日中、すぐそばに親しい神に当たり前のように語りかけるのだ。

ちなみに、(日本で言えばトラック野郎や寅さんのような)下町の運転手や機械工などやくざでキザな言葉使いで話す人々は、神のことを更に親しみを込めて、「情け深い師匠(ostād karīm)」「彼らの口調だとウツサーキャリーム」と呼ぶ。「情け深い(karīm)」とは九九ある神の属性のひとつだが、彼らのスラングでは、「情け深くある」とする男達が師と仰ぐ最も情け深い師匠」との意味が込められている。イランの寅さんたちが熱く、「情け深い師匠!」と呼びかける様子を見ると、イランの人々にとって神がどのくらい親しい存在か、微笑ましくも思えてしまうくらいだ。

神と隠喩と風刺に頼ったコミュニケーション(上級編)

さて、ペルシア語会話に少し慣れてきたところで、やや上

級編ともいえる話しぶりにも耳を傾けてみよう。

例えば、「神がもつと与えてくれますように(Khodā bishṭar bede)」は家や新車など大きな買物をした人への祝福で、子供でも自転車を買ってもらった友達にいつぱしの口調で言ってみたりする。だが、同じフレーズを呆れた口調で言えば、「また買ったの?」と尽きない現世的な物欲を揶揄する皮肉にもなる。また病の人への「神が癒してくれますように(Khodā shafā bede)」や、困難を抱えた人への「神が忍耐を与えてくれますように(Khodā sabr bede)」という祈りの言葉も、喧嘩で使うと、反語的に「頭がおかしいんじゃない?」との捨てぜりふになる。先に見た「神に感謝!」「たいしたものだ!」は反語的な意味でも使われ、例えばモスクの礼拝に出かけた敬虔なおばあさんも、説教が長くなってなかなか終わりをさえないと、チャドルの下から悪戯つぼく「マーシャッター!今日は長いわね」とささやいてみたりする。さて、こうした反語的表現でイラン人にとって一番ぐざりとくるのは、「神が理性を与えてくれますように(Khodā aql bede)」という表現だ。というのは、理性(aql)は先のトウヒードに続いてシニア派イスラームで最も大事な要素のひとつで、理性がないとは非常に未熟だと言われるようなもので、言われたほうは何も言えなくなるか、せいぜい「神の思召しがあれば(enshā allāh)」と応酬するしかなくなってしまう。

「面白いのは、「アッラー以外に他の神なし (al-laha ilā lan)」というイスラームの信仰告白の初めの一節が怒った時の台詞として用いられることだ。怒って冷静さを失っても神を忘れず、激しい感情を静めてもらう祈りの意味なのだが、アラビア語のこの信仰告白を苦々しくつぶやけば、怒っているんだと暗に伝えて予防線を張ることもできる、まさに上級編の使い方である。またどうもその真意は、「ペルシア語で言っても通じないみたいだから、アラビア語で言おうか?！」と相手への不快感をあらわにすることらしく、こんなたった一言の隠喩で一瞬のうちに幾つもの意味を伝えてしまう鮮やかな話術は、イラン人のお家芸ともいえるものだ。

こうした言い方はやりとりが行き詰まった時の最後の一手で、日本的な感覚なら捨てぜりふにも思えるのだが、実はそれだけにとどまらないもつと積極的な意味がある。それはやはりシーア派にとって大事な勸善懲惡の務め (amī be ma' ruf va nahī-ye monkar) と関連している。コーランとハディース (預言者ムハンマドの言行録だが、シーア派では歴代イマームの言行録も含める) が信仰の土台なのはスンナ派もシーア派も同じだが、シーア派ではそれに加えて、神が人間に善悪を判断する理性を与えたので、人間は常に善を選んで自己の完成を目指す務めがあるという信仰がある。シーア派の勸善懲惡とは、この信仰に即して周囲にも善を勧め悪を戒める務め

である。だから多くの人が、口論の果てにも相手を冷たく突き放すよりは、忍耐強く「親愛なる人」「僕の兄弟」「私の娘」「私のおじいさん」などと呼びかけて忠告し、相手の良心を呼び覚まそうと努力してみるのだろう。

こうして色々言っても相手が聞く耳を持たなければ、あとは「神に任せる (vā gozarai be khodā)」と言うしかないのだが、それはつまり、相手の過ちを神の裁きに任せるという意味に他ならず、そんな時は言う側も言われた側もかなり苦々しい顔になってしまう。

もし日本語でこんな言い方をされたら、「余計なお世話!」とかえって腹が立つってしまうのは間違いないけれど、ペルシア語の場合は少し様子が違っている。ひとつには、腹が立ちながらも皆信仰心が深いだけに、こうして神を持ち出されると反省して相手の言い分にも耳を傾けてみることだ(もつとも相手が軽々しくこうしたフレーズを頻発していると、「神、神っていうなよ (khodā khodā nakon)」と手厳しく批判することも忘れない)。もうひとつは、イラン人はとにかく話し好きで、気楽さと親しさは日本人が礼儀を重んじるのと同じくらいイラン人が大事にする態度である。だから相手に遠慮して言葉を控えるという態度は余程のことがなければ意味がなく、日本人の感覚ならなかなか言いにくいことでも気軽に率直に相手に伝えるのが当たり前で、とにかくコミュニケーション

シヨンが大事なのだ。それは伝統的に忠告や批判や風刺の文化が根付いていて、ペルシア文学にとつて重要な要素であり続けてきたことにも表れている。そして状況によって直接言えないことでも、隠喩 (kenayeh) という高等技術を駆使して実に鮮やかに伝えてしまうのだ。なかでも率直に相手を批判しつつもユーモアの口調を残した風刺 (taniz) はイラン人がもつとも得意とするところで、容赦なく突きつけられる厳しいお小言もどこか温かく憎めない。

上級編のフレーズはどれも、相手の非を直接に述べたりはしないけれど、そんな隠喩と風刺を使つて思っていることはつきりと伝える表現だ。だからイランの人々はどんなに切羽詰まった時でも、全能の神——イラン人なら「神は偉大だ」と言うだろう——に頼り、一方でペルシア語の豊かな伝達能力を最大限に駆使して、まだコミュニケーションを成り立たせてしまう余裕があるのかもしれない。ここで見たペルシア語会話の上級編はとりもなおさずコミュニケーションの上級編といつてもいいだろう。

それにしても、いつも神に話しかけ、万事が神と関係してしまうイラン人、こんな彼らを日本的に表現してみるとしたら、「触らぬ神に祟りなし」ならぬ「触る神に福来たり」といったところだろうか。でも実はペルシア語にはこれと同じような「神と共にいれば、神も君と共にいてくれる (bā khodā

bāsh, khodā ham bānāte)」という諺があるのだ。日本とイランの文化の違いとはいへ、これだけ正反對の諺が生まれてしまうのも不思議なものだが、イラン人の神観を表すにはいかにもぴったりにはないだろうか？

触る神には福来たり、祈り好きなコミュニケーションの達人



イランサッカー協会理事（2005年のイラン・日本戦にて）



古都イスファハーンのアルメニア人地区